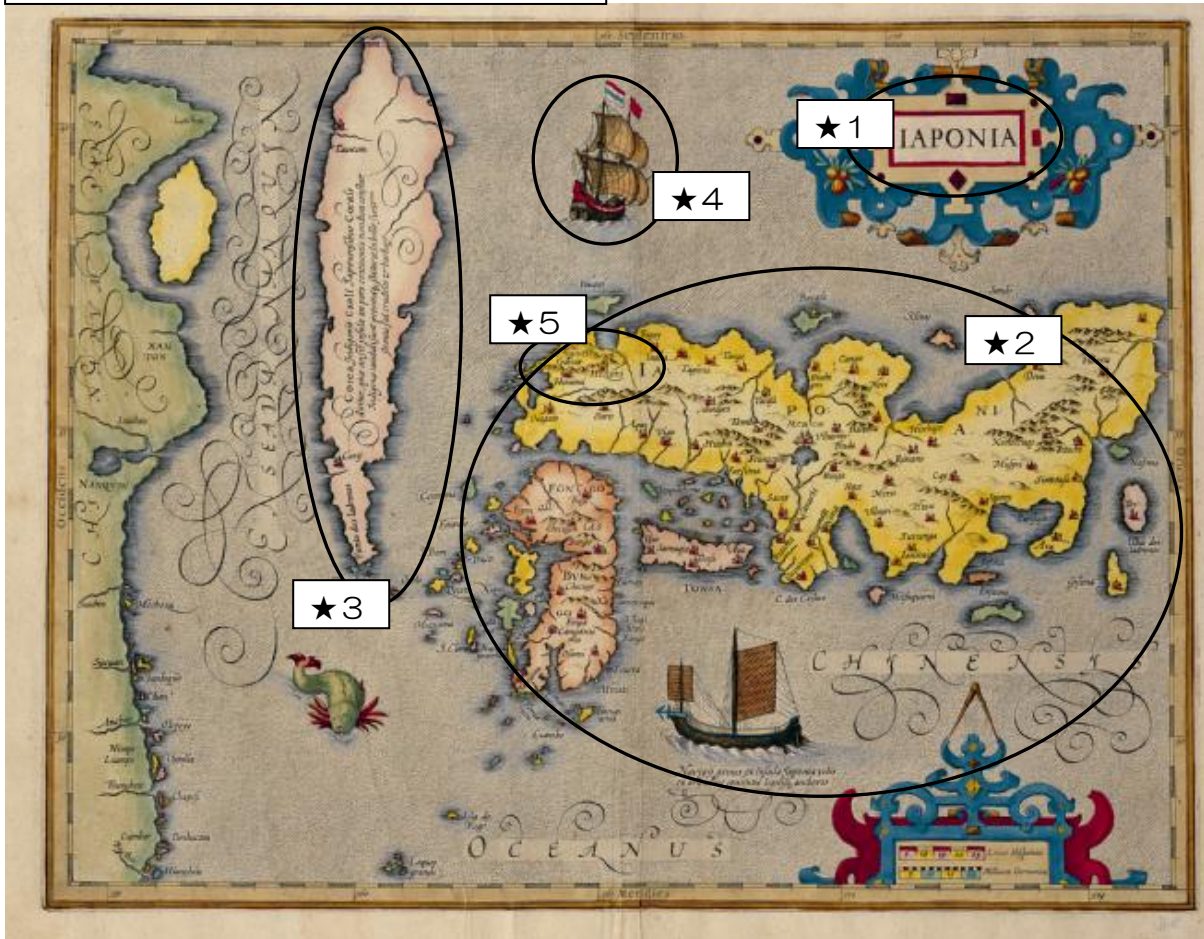


授業で使える当館所蔵地図

No. 12 『IAPONIA』  
 作成年：1606年  
 サイズ：42×52cm（銅版手彩色）  
 作者：ホンディウス



【解説】

ジェラルド・メルカトルは1585年に全世界の地図を集めて出版し始め、これに古代ギリシャ神話で地球を支える神の名をとって「アトラス（地図帳）」と名付けた。メルカトルの死後、ヨドクス・ホンディウスは原版を手に入れ、1606年に新版地図帳を出版、その際にこの日本図も付け加えた。※オルテリウス／テイセラの型に拠っているが、朝鮮についてはこれが島であるか大陸の一部であるかはまだ解明されていないという説明を付けている。

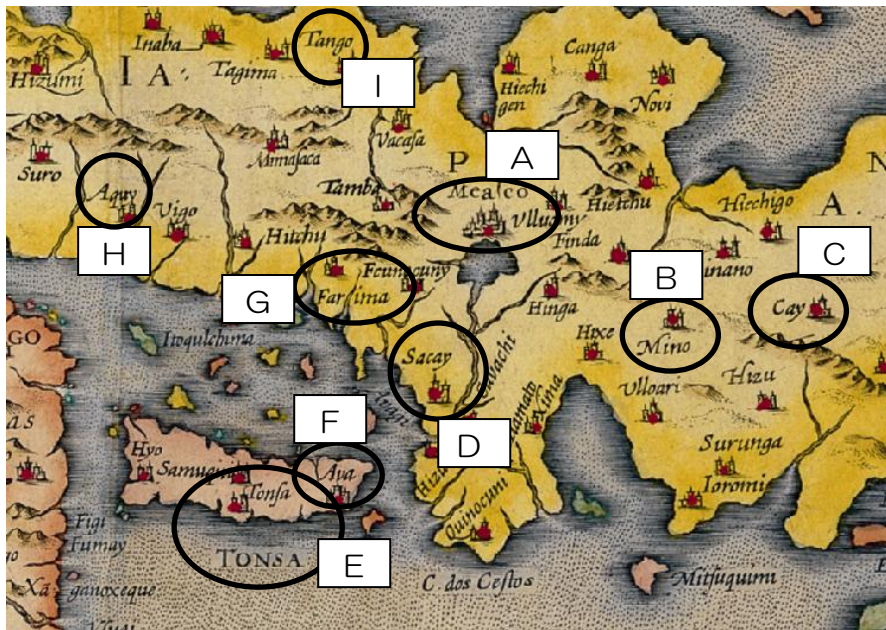
※オルテリウス／テイセラの型

オルテリウスはスペイン王室の地図製作者であり、ポルトガルのイエズス会士で数学者のテイセラから1592年2月20日に手紙とともにこの地図を受け取った。テイセラは、日本はもちろん、アジアにも行ったことがなかったが、直接または間接の情報源により日本に関する知識があったようである。彼の地図には、本州、九州、四国がほぼ正確な対比で描かれている。→この頃、別の新しい型の地図が出現していても、古い物をまだ模写したり、変形したりしながら後の地図に継承されたりすることで異なった型の系列が何百年も並行して存在していた。相互に影響しあうことにより、また新しい型が生まれる。より新しい型が以前の型に比べて常に進歩したものであるとは限らない。【参考：「西洋人の描いた日本地図」求龍堂】

★1 IAPONIA

「IAPONIA（ヤポニア）」は「日本」を意味するラテン語です。「IAPAN（ヤーパン）」（1570年のオルテリウスの地図）や「IAPON（ヤーボン）」（1652年のサンソン地図）など、当時の日本を示す言葉として地図上に示されている。

★2 日本の地名



- A : Meaco  
→当時の都
- B : Mino  
→当時の美濃
- C : Cay  
→当時の甲斐
- D : Sacay  
→当時の堺
- E : TONSA  
→当時の土佐
- F : Ava  
→当時の阿波
- G : Farima  
→当時の播磨
- H: Aquy  
→当時の安芸
- I : Tango  
→当時の丹後

オランダ語で地名が描かれているが、vをw、fをhに置き換えるなどして、hを無音にするとローマ字の発音に近くなる。美濃、土佐、安芸など日本の旧地名が分かる。

★3 朝鮮半島

細まりながら南へ伸びる島としての朝鮮も、この後多くの追隨者を生むテイセウ型の特徴として見逃すことはできない。朝鮮が島であるか大陸の一部であるかはまだ当時のヨーロッパでは解明されていない。

★4 オランダ船

オルテリウスの地図が出た1598年は、スペインの最盛期をつくったフェリペ2世が没した年である。当時、世界の覇権はスペインからオランダ・イギリスへと移りつつあった。ホンディウスはアムステルダムでこの地図を制作した。船にはオランダ国旗がみえる。

★4 石見銀山（島根県）

当時、銀の精錬技術が改良され、生産量が増加し、産出された大量の銀は、海外に輸出され、世界的に大きな影響を与えていた。

【利用の例】

○ヨーロッパ人が当時のアジアや日本をどのようにとらえていたかを知ることができる。

→朝鮮が島として描かれ大陸の一部であるかどうか、まだ解明されていなかったことや、日本として蝦夷地（北海道）が認識されていなかったことをとらえることができる。

○当時の日本の地名を知ることができる。

→日本の古地図の地名を理解するには、それぞれポルトガル語、イタリア語、オランダ語、場合によってはドイツ語のレンズを通して読む必要がある。ローマ字読みをすることで、当時の日本の地名を想像することができる。当時の城下町が地図上に表記してあり、現在の地名と比較しながら見てもよい。

○当時（江戸時代）の外交（外国とのつながり）を考えることができる。

→オランダの国旗をつけた船が日本の近くに描かれていることから、日本との関係のつながりの深さが伺える。